

国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 木部暢子
編『災害に学ぶ-文化資源の保全と再生-』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木部, 暢子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000791

木部暢子 編

『災害に学ぶ—文化資源の保全と再生—』

2015年3月 勉誠出版 四六判 328 ページ 3,200 円 + 税

木部 暢子



1. この本の趣旨

1995年1月17日の阪神淡路大震災、2011年3月11日の東日本大震災、この20年間に私たちは、大きな震災を2度経験しました。それに対して歴史学、民俗学、民族学、文学、言語学、環境学などの研究に携わっている私たちがどのように関わり、何を学んだのか、その報告書が本書です。

本書の母体をなすのは、人間文化研究機構連携研究プロジェクト「大規模災害と人間文化研究」の活動です。東日本大震災から1年目の2012年4月、それまで個別に震災復興活動を行っていた5つの機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館、国立国語研究所）が一緒になって、このプロジェクトが始まりました。

3年間のプロジェクト活動を通して明らかになったキーワードは、「災害に学ぶ」です。東日本大震災のときに、過去の津波の経験が活かされたために命が助かったという報告が何件もありました。経験を次の世代へ継承し、そこへまた新たな経験を積み重ねていくのが人間の文化であるということを、この話は如実に表しています。地域の復興と再生にあたって、このことをしっかりと確認しておきたい。そのような意味を込めて、本のタイトルを『災害に学ぶ』としました。

2. この本の構成

本書の構成は、以下のとおりです。上に述べた趣旨に沿って、東日本大震災の経験だけでなく、阪神淡路大震災や昭和の三陸津波の経験といった過去の経験やそれに基づく未来へ向けての提言も含んでいます。

まえがき	木部暢子
第一部 震災を語る	
講演 津波を越えて闇から光へ	山浦玄嗣
第二部 死者との対話	
生者の記憶、死者との対話	林 勲男
「無名の死者」の捏造——阪神・淡路大震災のメモリアル博物館 における被災と復興像の演出の特徴	寺田匡宏

第三部 文化財をレスキューする

- 文化財レスキュー活動を展示する——文化財レスキュー活動を
通した地域の多面的ネットワークと博物館 葉山 茂
- 文化財レスキューと生活文化の再創造——気仙沼小々汐オオイ
の事例から 小池淳一・川村清志
- 生活文化の記憶を取り戻す——文化財レスキューの現場から 日高真吾
- 東日本大震災における被災文書の救助・復旧活動 青木 睦

第四部 過去から未来へ

- 昭和三陸津波後の集落にみるコンパクトな復興 岡村健太郎
- 多文化社会における外国人支援——災害時・通院時のマニュアル
作成を通して 金 愛蘭
- 民間所在資料保全の過去・現在・未来 西村慎太郎

第一部「震災を語る」の「津波を越えて闇から光へ」は、2013年3月21日にこのプロジェクトが主催した公開シンポジウムでの講演の記録です。講師の山浦玄嗣氏は、岩手県大船渡市で病院を開業している医師ですが、同時にケセン語（岩手県気仙地域のことば）の研究者でもあります。講演では、3・11大震災のときの経験と津波を越えて出版した方言訳聖書『ガリラヤのイエシュー』のお話をさせていただきました。

第二部では、死者と生者の関係を取り上げています。林勲男氏（民博）の論考は、震災で亡くなってしまった死者のことを生者である遺族や親しい人々がどう語り、どう記憶していくのかという問題を扱ったもの、寺田匡宏氏（地球研）の論考は、阪神淡路大震災のメモリアル博物館「人と防災未来センター」の、過去と現在を接続させる多様な手法を用いた演出方法について論じたものです。

第三部は、文化財レスキューの現状とそこからの提言です。葉山茂氏（歴博）、小池淳一氏・川村清志氏（歴博）、日高真吾氏（民博）、青木睦氏（国文研）の論考は、いずれも被災した文化財のレスキュー活動の報告ですが、同時に、文化財を修復したり保存したりすることの意義は何なのかという文化財保護・保全の根本問題を問うています。

第四部は、人間文化に対する未来への提言です。岡村健太郎氏（東京大学）の論考は、昭和の三陸津波後の復興を多方面から考察し、それが現在の復興の道標となるという指摘、金愛蘭氏（広島大学）の論考は、情報弱者である外国人に災害時にどのような情報をどのように伝えるかについて考察したもの、西村慎太郎氏（国文研）の論考は、救済した被災資料も含めて、今後、民間資料をどのように保全し活用していくのかについて述べたものです。

3. この本の位置づけ

大きな災害をきっかけとして、人間の文化とは何かをもう一度問うてみよう、文化の継承の持つ意味をしっかりと確認しようというのが本書の目的です。各章で取り上げているのは個別の地域や事例ですが、各地に置き換えて読んでいただければ幸いです。

木部 暢子 (きべ・のぶこ)

国立国語研究所副所長，時空間変異研究系長。博士（文学）（九州大学）。鹿児島大学名誉教授。2010年4月より現職。
主な著書・論文：『鹿児島県のことば』（共著，明治書院，1997），『西南部九州二型アクセントの研究』（勉誠出版，2000），『日本語アクセント入門』（共著，三省堂，2012），『方言学入門』（共著，三省堂，2013），『じゃって方言なおもしとか』（岩波書店，2013）。

受賞：新村出財団研究助成（新村出財団，1990）。

社会活動：日本語学会理事，日本音声学会理事，日本学術会議会員。